

米国からの質問に対する回答

平成 14 年 5 月 25 日

(質問 1)

政岡先生が、大江先生から頂いた『根元の巻』は、完全に正当なものではないという人が居る。理由は、政岡先生が武専に行ったため、若いうち(多分 19 歳か 20 歳頃)に大江先生から直接指導を受ける事をしなくなったということ。だから、その人達は、政岡先生が大江先生の教えを完全に理解するには若過ぎたのではないかと思っている。

(回答)

政岡先生が大江先生から授かった『根元の巻』の正否について

○ 森繁樹先生よりの話

大江先生の、居合の本格的門人の第一号は、森繁樹先生である。森繁樹先生が四年生の時、旧制中学の合併があり、政岡壺実さんが二年生で同一中学に在籍することになって一緒に居合を習った。森繁樹先生が第一の門人、二年後輩の政岡先生が第二の門人という事になる。

政岡先生は、中学卒業後 2 ～ 3 年して武専に入学したそうだ。その間高知で居合を研修された。武専入学後も居合を続けられた。この時代に甲田盛夫 < 3 年先輩 >、佐藤忠三、黒住龍四郎 < 一年後輩 > に居合を指導しています。勿論、休暇帰省には大江先生に研修していました。

森先生の根元の巻は大正十三年の日付であります。私 < 井下 > は拝見、確認した。森先生が逝去される数年前だったので、90 歳くらいでした。その時の、森先生の話ですが、大江先生は、政岡先生も続けているし、進学後も帰省時には居合を見ているので、『彼にも根元の巻を支給しようと思う』と大江先生は言ったそうだ。(政岡先生の書いた本の、地の巻の中に根元の巻の写真があるが、それには日付が無い。これはこのような次第で、日付は書かずにいたものと思われる)

穂岐山先生へも直接の伝授ではなく、大江先生死後大江先生の奥様から渡されたものと承知している。(山本宅治の話。伝承)

政岡先生の根元の巻は正真のものである。そして、渡された時期は森先生に渡された後(大正十三年以降)であると思える。

- 政岡先生より直接私<井下>に釈明された事。居合の高知質につき。

戦後、(井下が)愛知より帰郷し現在地に定住するようになりし昭和23年ころ、政岡、山本晴介両先生に山内豊健先生が逝去されたので、今一度英信流を再勉強したいので入門させて下さいと言うと、政岡先生は、お前は山内先生の弟子だろう、山内先生の弟子をとる訳にはいかぬ。俺が知っている事は全部教えてやるが、入門は駄目だと天から入門を拒否されたので、尤もなことだと敬意を覚えた。その時、私の申し出は、高知の純粋な刀法を修得したいからだと言うと、晴介先生と政岡先生が相談して、今ならば大阪の(?)先生(名前を失念したが、大阪では3人の中に入っていた人だ)が一番いいだろうと言ってくれた。そして、俺の居合は中山先生の流派が混入しているからと言っていた。しかし、私が思うに大江の二番弟子だ。(一番弟子は森、二番弟子は政岡)

(註) ?印は、善通寺の軽重隊の准尉で、高知出身の人で、剣道でも良く知られていた人。(大江先生の弟子)

(質問2)

大江先生は、『根元の巻』を少なくとも三人の先生方に渡された事を私は知っております。即ち、穂岐山波雄先生、森茂樹先生、そして政岡一実先生。この3つの『根元の巻』は夫々違ったものであると聞いております。

(回答)

三人の先生に夫々違った形で渡されたのは前述のとおり。

- 根元の巻の形態

大江先生の筆跡は、森先生の曰く、達筆ではないが一所懸命に書かれていて感銘深く先生に接見している如く覚えると言って軸装(巻物)になって箱に入っていたのを拝見した。巻紙を表装したので、軸長は約三十センチに近くあったと思う。そして私(森)の死後はどのようにしたらよいかと話をされたので、私(井下)は、高知の山内神社の宝物展示会場に、先生の根元の巻は展示されていましたと話すと、そうしようかと言っていたが、その後の処置については知らない。森先生の『根元の巻』の軸装は大江先生の手製の表装で素人式である事が一見で判明する。そして森先生が表装師に改装を依頼したら以ての外だと叱正されたとの事で昔のままであると話していました。故に外見は三人三様かもしれない。

(質問3)

ほとんどの人が、穂岐山波雄先生が大江先生の直接の後継者で、この流れが

無双直伝英信流の正統であると信じているようです。しかし、無双直伝英信流の家元は一つに限る事はありませんとも聞いております。無双直伝英信流の最高の認定は根元の巻であるとも。大変複雑な問題であると思っておりますが、他の人の資格証明に疑義を挟むものではありません。しかし、根元の巻の他に、より位の高い証明書みたいなものはないのでしょうか？

(回答)

○ 大江先生直接の後継者の件について

大江先生の勤めておられた学校に穂岐山先生も勤めていられて、剣道を教えていた関係で、同僚であり且つ門弟といった居合関係であり、大江先生逝去後に奥様が根元の巻を穂岐山先生にもらってもらい道統の維持継承を公認された。穂岐山先生も急逝されたので、高知県下で継承者が確定していなかった。

これより以前、居合振興の為、県外に普及の講習などが大江先生時代に(新潟県)実施されていた。その後も阪神地方に講習などがあり、神戸市、大阪市などで盛んになった。そこで講習を受けた熱心家で実業家達の中から、援助者が出現し高知県外不出の鉄則も神威を喪失して、十九代何某が大阪市の河野百鍊氏に二十代を譲渡した。それ以来、宗家など称する表現が流行した。

森先生は、英信流に宗家などない。若し問題が生起するような事あれば私は出向いて話をしたいと、私に話していた。最高の認定は根元の巻より以外に知らない。

而し、戦後、剣道連盟が創設されて段位称号が設定されて以来、旧来の伝書などはとやかく言う者が少なくなった。しかし、全剣連の居合に対する理念と従来 of 封建時代の居合の理念は異質なものがあ段位もさることながら『根元の巻』にも本質的なものが存在する。例えば、洋装の紳士と和服の紳士のようなものかも知れない。(同一の人で考えるとそう思える)

(質問 4)

政岡先生が第二次世界大戦の前に金沢に居た頃、同じ金沢出身の中山博道先生との関係を持ったらしい。この事が、政岡先生の居合術に対する解釈に影響を与えているらしい。

(回答)

○ 政岡先生の立場の変遷

高知における大江先生と政岡先生の師弟関係は、旧制中学時代よりあり、武專在学中も、卒業後も、師弟関係に変化なし。金沢に就職されても変化なし。たまたま金沢出身の中山博道先生の講習会などで東京から中山先生が金沢に来られた時、剣道はさることながら居合については政岡先生が大江先生の弟子である事から、中山先生が研究に大いに利用されて、特に信頼あり。(中山先生は、無双直伝英信流を研究すべく高知まで出掛けしたが、直接教えるを受ける事適わず、独学で研究し、夢想神伝流を開いた)

『戦後は、休息状態であったが』政岡先生も帰省し、村会議長など学校復活、新校舎建設など活躍されたが、剣道復活で金沢移住し以来金沢で逝去されるまで息子さんも二人とも医博で、金沢で居られる。

そのうち全日居が設立され、政岡先生も要所に職を与えられ活躍した。しかし、全日居は早く設立したために、高知の先輩先生が要職に多く位置していた。政岡先生も要職の一員であったが全剣連に居合部が遅まきながら併設される事になった。全剣連は、旧武徳会の自然発生的連盟なので、武徳会出身なるが故に私(政岡)は全居連より全剣連居合部に移る決心をしたと、私(井下)に語った事でした。その関係で、居合をやっていた者で、全剣連に縁故のある者は現時点で全日居であっても、我も我もと全剣連へ移籍した。私(井下)も居合六段であったが、全剣連の居合四段で全剣連へ転籍した次第です。

その転籍数は、全居連の経済上大損失となる上に、全日居の要職にある高知出身の居合先輩者達は、政岡は全剣連の要職を狙い鞍替えをしたと邪推し、排斥の気運が生じ派閥が生じた如く他見された。政岡先生は、全剣連に転籍したので、高知は二つに割れた形となった。今まで、仲良く英信流をやっていた者が話もしないようになっていた。

(註) 故意の変化でなく、自然変化の当然の推移であると思う(井下)

(質問 5)

岩田先生がお書きになった『土佐の英信流』の中にある無双直伝英信流の系図の中に、政岡先生のお名前が見受けられない。岩田先生は高い名声を得ておりますし、ご存命の中でももっとも無双直伝英信流と大江先生について熟知されおられる方だと存じております。そういう高い知識がありながら、何故彼の

本から政岡先生の名前が消えているのか不思議でなりません。他の系図には必ず政岡先生の名前が載っているのに。

(回答)

○ 著述に氏名が無い所以の概略

岩田氏の居合の師は山本宅治十段範士（全日居）であり、岩田氏が戦後居合を始めた時私も最初指導した。その後、藤村栄次先生(剣道で居合はしない。警察官出身)に居合の指導をしてもらう本場の先生を教えてくださいと聞いて聞くと教えてくれたのが山本宅治十段範士だった。以来五年間程、月に1～2回高知まで習いに行きその度に田岡傳先生（宅治先生と同じ位の全日居の剣・居出身）からも指導を受けた。

故に岩田氏は全日居段を有していた。タマタマ香川で第六回全日本居合道大会が私の恩師妹尾武俊先生の尽力で、初めて地方大会に移った。その妹尾恩師が井下と岩田がこの大会に出ないのは運営上こまるから、岩田を何とかならぬかとの発言で、岩田が全剣連へ移籍の決心をした。そしてこの全剣連の大会に打：井下、仕：岩田で詰め合いの位を公開演武して政岡先生が、文章にても心得のある者は一応武技を体得演技が可能だと自信を得たという事で出版を決心したと言っている。

(井下と岩田は、旧制中学の同級生。その三豊中学で剣道を妹尾武俊先生から指導を受ける。Kasey(註))

六回大会以来、岩田は全剣連の居合人として活躍している。平成 14 年 5 月 5 日～12 日まで、愛媛県の大洲国立青年の家で、英国から五名が居合研修に来日し、岩田が門人四名程連れて指導に行っている。（京都の大会には、風聞によると風邪で不出演だと聞いて心配して、帰省して見舞いに行くつもりでこの情報に接したので安心した。）

(英国の居合＜廬州会＞の件は別記、後述の如し)

政岡先生と高知の英信流の人脈は全日居から全剣連に移った二つの連盟の関係にあり、文部省は、全剣連関係は認めるが、全日連関係は不許可である。その為、岩田と山本宅治、別に岩田と政岡先生の融和が出来ない情勢で、岩田氏著書の中へ政岡先生の氏名を掲示することが困難になるのです。全剣連居合発足は遅れたが、中山先生の関係で政岡先生中心に設立されたので、政岡先生の権威は全剣連居合の総帥的役割を持った、故に尚一層高知の

居合先輩界や、日居関係との溝が深くなったが、個人的には平穩。

(註) 現在は過去の因を持った人は故人となり、若い者達は無関心のような。

(質問 6)

この二人でやる形を含んだ無双直伝英信流を完全な形で保存しようとしているグループをご存知ありませんか？

(回答)

○ あなた(Eさん)は『地の巻』をお持ちのようですが、
(1)『発刊のことば』の2ページ下の段終わりから4行目(第六回大会云々)より3ページ上の段6行目までの詰合いの位のことを書かれていますが、この打ち太刀は私で、仕太刀が岩田憲一氏でした。

(2)119 ページから 123 ページ

『附』 居物の巻 (註)据を略して居とした。

『上壇築様、並に斬様之事』

(註)119 ページから 123 ページまでは、『附』とあります如く、英信流の書物以外より政岡先生が居合に関係あり、必要とお考えで『附』として他流派の書より(古文書より)転載されたもので、私の所有している古文書を差し上げたものなのです。

(3)昔の武的流派には武技として弓馬刀槍以外に水泳、柔、など各種の格闘技がありましたので、英信流は刀法だけでなく古伝にはありました事ながら政岡先生が古文書より発掘研究されて『兵法形』として写真で示されていますが、他にもあったが今は手がかり困難であると仰せられていました。高知でも現在この種を研究保存している人を知りません。『古流太刀打之位』など言う位で、他はほとんど見聞いたしません。

以上

別紙追記

5月5日～12日まで、イギリス人が愛媛県に来た事に関して

イギリスの居合(英信流)は、今日の名は『蘆州会(ロシュウカイ)』ということだが、大江先生は蘆州と号されたのである。発端は、高知山本晴介先生の居合門人で岡山市の山浜善数(兄)、山浜保雄(弟)があり、兄は簞会社、弟は防具商で兩人とも居合八段という岡山県下の指導的地位であ

り、兄が最初にイギリスへ居合の指導に行き、数年を経ずして死亡。その後弟も何回か渡英したようだが、又死亡。その後春名が指導に行っていたが二回くらいで指導能力が不足を感じ岩田憲一氏に依頼し、二回くらい岩田も行ったようだ。

そして、岩田の香川県下の仲間での『蘆州会』の名をそのままイギリスでも使用して今日になっているが、居合の為の渡英は、蘆州会(岩田)はあまり実施していないが、別に全剣連の国際指導計画で時々全剣連から派遣指導員が行く時に、剣道、居合(制定居合、古流居合(英信流と神伝流を主とす))があり、居合熱がヨーロッパで盛んになり、その対抗作用というか居合が盛んになり、結局英国の蘆州会も他の居合との進展を期しての渡日となったものと思います。結局山洪兄弟の蒔いた種が春名に伝わり、岩田が肩代わりしたので、渡日した事が生じたものだと思う。

このような伝承で、自然に流派が生じ末端では我が我がという自己主張現象も起こる事かと思われる。そして、大江派は、何々派と言ったものの中に宣伝的意欲のある者が、派閥を唱えることになったのだろう。

欧州の居合は、全剣連派遣の講師として色々な人が行くので、主として全剣連制定の居合を主に伝達しているが、古流も講習に付加しているために、講師の各人が古流を伝達するので、主として神伝流、英信流ではあるが、古流の方は統一した、一貫性の無い講習になっていて、受講者に迷いの念があるようであり、外国では流派の対立や、反目が在るかのごとく受け取れるのではなからうかと思った事だ。

Eさんへメッセージ

記

居合は想定により演武するので、同じ刀法を同一人が演技しても年齢により、体調により、変質した表現になるので、各人各様になるものです。故に、その人その人で想定に忠実にとっても、年月を経るにつれて変化するのが自然の理です。従って、他人の居合を参考にするのは良い事ですが、急に他人の意見を無批判に受け入れることなく師伝を忠実にと考えて自分なりに修練すればよいと思って精進されたい。他人の意見は、有難く承っておいて自分の居合、師を根元に精進がよいのでは。

以上